テーマ：砂・土・泥

子どもの森矢の口保育園　２歳児クラスめろん組

テーマを設定する

〇砂に触れながら作っては崩し、崩しては作る遊びを繰り返し体験し、形が変化することの楽しさや不思議さを味わう。
それらの遊びを楽しみ発展させることで、友だちと関わる力も育む

環境をデザインする

〇準備　園庭に砂場を設置

活動スケジュール

活動内容	時間
身体を動かして遊ぶ	１０分
(静と動の活動を両方取り入れて集中力を高めるため)	
テラスに移動し、砂に触れる (砂の感触に興味を持ち、感じたことを言葉で表現できるように促した)	20分

第１回　2025年11月２５日

探究活動を実践する

〇活動内容

砂場で遊び、砂の感触を楽しむ。





〇子ども達の様子

- 目を輝かせながら新しい砂場に近づき、砂を掴んでは手離して感触を確かめていた。
- じっくりと触れて感触を確かめる子、握りしめを自分の顔の高さから落としてパラパラと落ちる様子に見入る子、そっと放ってみようとする子もいた。
- 保育者の問いかけには「フワフワだよ」「つめたいよ」「なんだか、かたいよ」と次々に応え感じた感触を思い思いに言葉で伝えていた。



〇振り返りを踏まえた気付き

導入では子どもに伝わりやすいよう、保育者が丁寧に砂に触れて「つめたいかな、あついかな」「さらさらかな、ざらざらかな」などと感触を表現する言葉を使って声かけをした。すると子どもも砂に触れながら触感を確かめ、自分の感覚と向き合っていた。五感の刺激は、乳幼児期の脳の発達に重要であることを鑑みると、今後も五感を使って遊べる活動を積極的に取り入れていきたいと感じる活動となった。

テーマ：砂・土・泥

子どもの森矢の口保育園　２歳児クラス（めろん組）

第２回　2025年12月

環境をデザインする

〇準備　砂場用の料理道具
砂が扱いやすいように、少し湿らせておく。必要に応じて道具の使い方を提案できるようにする。

活動スケジュール

活動内容	時間
砂の感触を楽しむ	10分
料理道具を使って遊ぶ	20分

探究活動を実践する

〇活動内容
手で砂に触れる活動は引き続き行う。
さらに、料理道具を使って遊ぶ事を楽しむ。

〇子どもたちの様子

- おたまやコップ・トレーを自ら手に取り、砂をすくう・入れる
- 移すといった動作を繰り返し遊んでいた。
- 砂の量によって重さが変わることに気づき、こぼさないように慎重に運ぶ姿や、入れなおす姿が見られ、指先の動作を十分に行いながら遊ぶ姿が見られた。
- 乾燥した砂と、水分を含む砂の感触や固まりやすさの違いを感じ取り「砂がサラサラだね」「砂が固まってる」などと伝えていた。
- 道具を変えながら遊ぶ子もいた。それぞれが好きな砂場道具を見つけ集中して遊んでいた。





〇振り返りを踏まえた気付き

- 道具を使って遊ぶ際には「やってみたい」「使ってみたい」という意欲的な姿が強く見られた。
- 好きな道具を手に取り「つくっては壊し、壊してはつくる」ことができる砂遊びならではの楽しさを、どの子も存分に感じていた。

テーマ：砂・土・泥

第3回　2026年1月

子どもの森矢の口保育園　２歳児クラス（めろん組）

環境をデザインする

- 砂場用料理道具、水、キッチン、
- 事前に砂を濡らす。

活動スケジュール

活動内容	時間
料理道具を使ってごっこあそびをして遊ぶ	30分

探究活動を実践する

○活動内容

- 砂の形が変化することの楽しさや不思議さを味わいながら、さまざまな遊びを経験する。
- 砂遊びを通してごっこ遊びなど、子ども同士の関わりがうまれる遊びへ発展するように関わる。

○子どもたちの様子

- 好きな道具を手に取り、プリンカップやドーナツカップに砂を入れ、お菓子作りに見立てて遊んでいた。その際、「プリンですよ」「はいどうぞ、おまたせしました」など、子ども同士の言葉のやりとりも生まれていた。そのやり取りにさりげなく保育者が加わり、子ども同士の関わりが繋がるように関わった。そばで見ていた子も加わり、多くの子がお菓子屋さんになりきって「いらっしゃませ」「なにが、いいですか」などとやり取りをしながら砂遊びを楽しんだ。
- 真剣な表情でバケツに砂を詰め、ひっくり返して型をとる姿も見られた。バケツ型の砂を満足気に見つめた後、自分の手で感触を確かめるように崩していた。
- 道具の貸し借りをめぐって、子ども同士のトラブルになりそうな場面もあった。室内遊び同様、「いま、つかっているよ」「あとで、かしてね」などと伝え合う姿も見られた。







○振り返りを踏まえた気付き

砂を使って作ったプリンやドーナツを使い、遊びはごっこ遊びやなりきり遊びへ発展した。主に高月齢児が中心となり「プリンをどうぞ」「いらっしゃいませ。どれがいいですか。」と言葉を伴った関わりが活発に生まれていた。低月齢児もその姿をまねし、同じように遊んでみようとしていた。さらに道具の貸し借りをめぐり自分の気持ちを伝える機会が増え、友だちの気持ちに気づく経験を繰り返しすることで、豊かな社会性を育むことも期待できる。